様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４３２００８８

研究課題名（和文）文法と語用論の関係に関する日英語対照研究

研究課題名（英文）A Contrastive Study of Japanese and English on the Relation between Grammar and Pragmatics

研究代表者
廣瀬　幸生（HIROSE, Yukio）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：００１８１２１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日英語の文法・語用論的現象を、「言語使用の三層モデル」という理論的観点から考察した。この理論では、言語使用は、「状況把握」、「状況報告」、「対人関係」という三つの層からなり、言語のもつ自己中心性が英語のように「公的自己」（伝達の主体としての話し手）にあるか、日本語のように「私的自己」（思考・意識の主体としての話し手）にあるかによって、三つの層の組み合わせが異なるとする。文法と語用論の関係にかかわる日英語の差は、主に、この三つの層の組み合わせの違いから生じることを示した。

研究成果の概要（英文）：This study investigated grammatico-pragmatic phenomena in Japanese and English from the theoretical perspective of the “three-tier model of language use,” which states that language use consists of three tiers called “situation construal,” “situation report,” and “interpersonal relationship,” and that languages differ as to how the three tiers are combined, according to whether their basic egocentricity lies in the “public self” (i.e. the speaker as the subject of communicating), as in English, or the “private self” (i.e. the speaker as the subject of thinking or consciousness), as in Japanese. It was shown that grammatico-pragmatic differences between Japanese and English stem primarily from the difference in the way the three tiers are linked in each language.

研究分野：人文学・言語学・英語学

キーワード：文法　語用論　対照言語学　言語形式　言語機能　状況把握　状況報告　対人関係

１．研究開始当初の背景

認知言語学的観点からの日英語対照研究では、日本語は英語に比べて、話し手が状況に主体的に関与する度合いが強いため、当該状況がより主観的に把握されるということが明らかにされている。一方、社会言語学的観点からの日英語対照研究では、日本語は、情報伝達の際、聞き手との社会的・心理的関係を常に考慮しなければならないが、英語はその限りでないという点が強調されている。

認知言語学における主観性が話し手個人と状況の関係にかかわるのに対し、社会言語学では話し手の対人意識の重要性に焦点が当てられる。日英語における文法と語用論の関係を考察する際は、この両面にしかるべき注意を払う必要がある。つまり、上記の認知言語学的観点と社会言語学的観点を統合する理論が求められなければならない。

２．研究の目的

本研究は、文法と語用論の関係にかかわる日英語の違いを記述・説明するための一般的枠組みを提示し、それをもとに体系的で実証的な対照研究を行うのが目的である。ここでの枠組みは、代表者（廣瀬）がこれまで一連の研究で論じてきた「公的自己」（伝達の主体としての話し手）と「私的自己」（思考・意識の主体としての話し手）という観点を発展させた「言語使用の三層モデル」と呼ぶものである。言語使用は、「状況把握」、「状況報告」、「対人関係」という三つの層からなり、言語のもつ自己中心性が英語のように公的自己にあるか、日本語のように私的自己にあるかによって、三つの層の組み合わせが異なる、とする理論である。文法と語用論の関係にかかわる日英語の差は、この三つの層の組み合わせの違いから生じるということを基本仮説として研究を進める。

３．研究の方法

本研究は、代表者が提案する「言語使用の三層モデル」に基づいて、文法と語用論の関係にかかわる日英語の言語現象を対照言語学的に考察するものである。したがって、できるだけ様々な現象を広く深く研究するために、五名の研究者がそれぞれ専門的に得意とする領域に対応して、主に、次の五つの研究単位を設け、互いに緊密な連携を取りながら研究を進める。

(1)　主観性・モダリティ・ポライトネスに関する日英語対照研究（担当：廣瀬幸生）

(2)　時制とアスペクトに関する日英語対照研究（担当：和田尚明）

(3)　意味役割と情報構造に関する日英語対照研究（担当：加賀信広）

(4)　削除・省略・照応に関する日英語対照研究（担当：島田雅晴）

(5)　文接続と接続構文に関する日英語対照研究（担当：金谷優）

これ以外にも、関連する現象の考察・検討なども随時行う。上記研究単位のうち、(1)と(2)と(5)は、特に、認知意味論、機能論、語用論の視座を重視し、一方、(3)と(4)は生成文法および形態統語論の視座も重視する。この役割分担によって、意味と形式のバランスのとれた研究を目指す。

４．研究成果

(1)　本研究の最も大きな成果は、言語使用の三層モデルに関して、次の①から④までの各主張の妥当性を日英語の言語データに基づいて示すことができた点である。

①　状況を捉え、それを言語化する話し手を、伝達の主体としての「公的自己」と、思考・意識の主体としての「私的自己」という二つの側面に解体する。英語は公的自己中心の言語、日本語は私的自己中心の言語と特徴づけられる。

②　言語使用は、「状況把握」（私的自己による思いの形成）、「状況報告」（公的自己による思いの伝達）、「対人関係」（公的自己による聞き手への配慮）という三つの層からなり、言語のもつ自己中心性が公的自己にあるか、私的自己にあるかによって、三つの層の組み合わせが異なる。

③　公的自己中心の英語では、通常、状況把握と状況報告が一体化し、それに対人関係の層が付加される。状況把握と状況報告が一体化するということは、状況を報告する状況外の視点が優先されるということであり、話し手は、報告上必要なことはできるだけ言語化することになる。したがって、話し手自身が状況に当事者として関与するときでも、報告者の視点は、状況内の自己を他者と同様に言語化される側におく。一方、状況報告と対人関係が一体化していないということは、状況報告において、聞き手との特定の関係に依存しない、無標の情報伝達レベルを想定することができるということである（話し手と聞き手は言語的に対等で、双方向的関係にある）。そのうえで、聞き手との関係に応じた対人配慮（ポライトネス）が加味され、言語使用が決定される。

④　私的自己中心の日本語では、通常、状況把握が状況報告および対人関係から独立している。したがって、状況把握においては、話し手は自由に状況の中に身をおき、状況内から状況を捉えることができ、また、すでに自分の意識の中に確立していることは言語化する必要はない。しかし一方、状況報告は対人関係と一体化しており、話し手は、聞き手との特定の関係を考慮し、かつ、その関係において自己を規定し、状況報告を行わなければならない。したがって、状況報告においては、対人関係の視点ができるだけ言語化されなければならず、対人関係に中立的な、無標の情報伝達レベルを想定することはできない。

(2)　言語使用の三層モデルの要点は、図示すると下図のようになる。図における略語

や記号の意味するところは図の下に記した通りである。話し手の自己中心性（○で囲んだ S で、無標の直示的中心をなす）が公的自己にあるのが英語で、私的自己にあるのが日本語である。図１において状況報告の S から状況把握の S への縦矢印は、英語では状況を把握する私的自己が、状況を報告する公的自己の観点から捉えられ表現されることを表し、図２における状況報告の S から対人関係の S への縦矢印は、日本語では公的自己は状況を報告する際に聞き手との対人関係の把握も表現に込めることを表す。

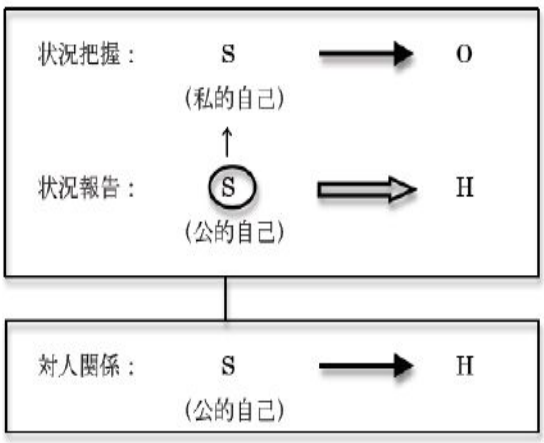


図１ 公的自己中心の英語

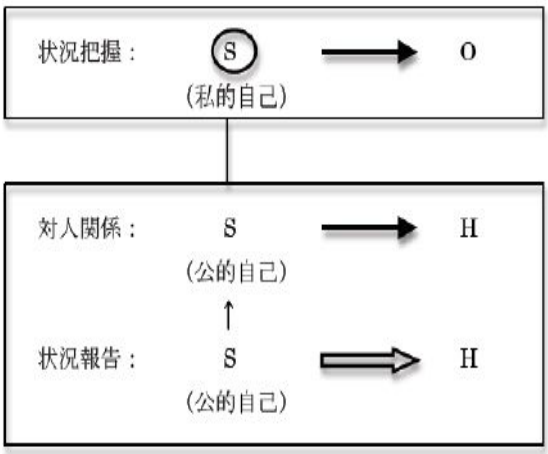
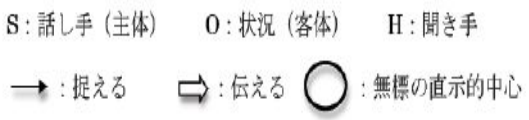


図２ 私的自己中心の日本語



(3) 言語使用の三層モデルは、言語の機能に対応する言語使用のレベルを想定することで、文法と語用論の関係を総合的に捉える枠組みになっている点に大きな特色がある。三層のうち、状況把握層は思考を表現する機能、状況報告層は情報を伝達する機能、対人関係層は対人関係に配慮する機能にそれぞれ対応する。そして、日英語の差はこの三層の組み合わせが異なることから生じると主張する点に、このモデルの独創性がある。たとえば、英語では、状況報告と対人関係が一体化していないということがコミュニケーションにおける情報伝達の側面と対人配慮の側面（フェイスの維持）を分けて考えやすい理由となる。一方、日本語では、状況把握が状況報告と独立していることから、独り言など思いのレベルの表現は対人関係への配慮なしでいいが、状況報告は対人関係と一体化していることから、情報伝達には常に対人配慮が不可欠となる（そして、これが対人関係に応じた表現を豊かにする）。このような帰結がほかにも、日英語の文法・語用論に関して、様々な形で導くことが可能になっている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２９件）

① 廣瀬幸生「主観性と言語使用の三層モデル」『ラネカーの（間）主観性とその展開』323-345, 2016. 査読無

② 廣瀬幸生「日英語における時間のメタファーと主観性―言語使用の三層モデルからの視点」『言語の主観性―認知とポライトネスの接点』19-34, 2016. 査読無

③ 加賀信広「日本語受動文の統語構造再考（1）」『文藝言語研究：言語篇』69, 59-82, 2016. 査読有
http://hdl.handle.net/2241/00138342

④ Shizawa, Takashi and Yukio Hirose, “Introduction: Public/Private-Self-Centeredness and Grammatical Phenomena in Japanese and English—The Perspective of the Three-Tier Model of Language Use,” *English Linguistics* 32, 114-119. 2015. 査読有
http://elsj.jp/english_linguistics-eng/english-linguistics-online/

⑤ Hirose, Yukio, “An Overview of the Three-Tier Model of Language Use,” *English Linguistics* 32, 120-138. 2015. 査読有
http://elsj.jp/english_linguistics-eng/english-linguistics-online/

⑥ Shimada, Masaharu, Akiko Nagano, and Tatsuhiro Okubo, “Priscianic Formation in Compounding and Upgrading as Stem-Formation,” *Tsukuba English Studies* 34, 1-31, 2015. 査読有

⑦ Nagano, Akiko and Masaharu Shimada, “Relational Adjectives in English and Japanese and the RA vs. PP Debate,” *Morphology and Semantics: MMM9 On-line Proceedings*, 105-133, 2015. 査読有
http://electra.lis.upatras.gr/index.php/mmm/issue/view/293/showToc

⑧ 和田尚明「英語の単純現在形の包括的分析」『時制ならびにその関連領域と認知のメ

カニズム』1-45, 2015. 査読有
⑨ 和田尚明「Be Going To と Aller 未来形：英仏対照研究」『文藝言語研究：言語篇』68, 121-182, 2015. 査読有
http://hdl.handle.net/2241/00129354
⑩ Kanetani, Masaru, "On the New Usage of *Because*,"『文藝言語研究：言語篇』68, 63-80, 2015. 査読有
http://hdl.handle.net/2241/00129328
⑪ 廣瀬幸生「叙述型比較と領域型比較―比較構文の日英語対照研究」『言語研究の視座』110-125, 2015. 査読無
⑫ 加賀信広「日本語被害受動文の成立について」『言語研究の視座』126-139, 2015. 査読無
⑬ 和田尚明「英語の単純現在形の分析再び」『言語研究の視座』292-308, 2015. 査読無
⑭ 和田尚明「英語の 3 人称小説における過去時制形式の解釈メカニズム」『認知言語学論考 12』291-335, 2015. 査読有
⑮ Hirose, Yukio, "The Conceptual Basis for Reflexive Constructions in Japanese," *Journal of Pragmatics* 68, 99-116. 2014. 査読有
DOI: 10.1016/j.pragma.2014.05.007
⑯ Nagano, Akiko and Masaharu Shimada, "Morphological Theory and Orthography: *Kanji* as a Representation of Lexemes," *Journal of Linguistics* 50, 323-364, 2014. 査読有
DOI: 10.1017/S0022226714000024
⑰ Kanetani, Masaru, "The 'Marginal Acceptability' of Noun Phrase Modification by an Adverb Clause,"『文藝言語研究：言語篇』66, 21-34, 2014. 査読有
http://hdl.handle.net/2241/00123570
⑱ 廣瀬幸生、今野弘章、五十嵐啓太、志澤剛「公的自己・私的自己中心性と日英語の文法現象：『言語使用の三層モデル』からの視点」*JELS* 31（日本英語学会第 31 回大会研究発表論文集）267-268, 2014. 査読無
⑲ Hirose, Yukio, "Deconstruction of the Speaker and the Three-Tier Model of Language Use," *Tsukuba English Studies* 32, 1-28, 2013. 査読有
http://hdl.handle.net/2241/00123089
⑳ Shimada, Masaharu and Akiko Nagano, "Two Types of Bound Items and Their Interaction with Morphology and Syntax," *Interfaces in Language* 3, 57-81, 2013. 査読有
㉑ Wada, Naoaki, "A Unified Model of Tense and Modality and the Three-Tier Model of Language Use," *Tsukuba English Studies* 32, 29-70, 2013. 査読有
http://hdl.handle.net/2241/00123090
㉒ Wada, Naoaki, "On the So-Called Future-Progressive Construction," *English Language and Linguistics* 17, 391-414, 2013. 査読有
DOI: 10.1017/S1360674313000099
㉓ Kanetani, Masaru, "Noun Phrase Modifications by Adverb Clauses,"『文藝言語研究：言語篇』64, 41-58, 2013. 査読有
http://hdl.handle.net/2241/119890
㉔ 和田尚明「英語とフランス語の未来表現の比較」『文藝言語研究：言語篇』63, 109-148, 2013. 査読有
http://hdl.handle.net/2241/118969
㉕ 廣瀬幸生「公的表現・私的表現と日英語の話法」『英語語法文法研究』19, 20-34, 2012. 査読有
㉖ 加賀信広「二重目的語構文と与格交替」『構文と意味』49-68, 2012. 査読無
㉗ Shimada, Masaharu, "Coordinated Compounds: Comparison between English and Japanese," *SKASE Journal of Theoretical Linguistics* 10, 77-96, 2012. 査読有
http://www.skase.sk/Volumes/JTL22/index.html
㉘ Kanetani, Masaru, "Another Look at the Metalinguistic *Because*-Clause," *Tsukuba English Studies* 31, 1-18, 2012. 査読有
http://hdl.handle.net/2241/00123075
㉙ 金谷優「副詞節による名詞句の修飾」『英語語法文法研究』19, 114-128, 2012. 査読有

〔学会発表〕（計５０件）
① 廣瀬幸生「英語との比較から見た日本語再帰構文の多様性とその概念的基盤」静岡県立大学意味論研究会、2015.12.19、静岡県立大学（静岡県・静岡市）
② 廣瀬幸生「言語使用の三層モデルと日英語のデフォルト志向性（の解除）―英語の非定形節に見られる主体化現象を中心に」第 6 回奈良女子大学文学部欧米言語文化学講演会、2015.12.12、奈良女子大学（奈良県・奈良市）
③ 加賀信広「日本語受動文と意味役割」日本中部言語学会第 62 回定例研究会、2015.12.12、静岡県立大学（静岡県・静岡市）
④ Shimada, Masaharu, "Apparent Omission of Inflectional Endings in Japanese Adjectives," The International Workshop on Syntactic Cartography 2015, 2015.12.6, 北京語言大学（北京・中国）
⑤ 長野明子、島田雅晴「『的』の新用法：属性叙述の範囲指定としての対照焦点」日本言語学会第 151 回大会、2015.11.28、名古屋大学（愛知県・名古屋市）
⑥ 島田雅晴「Mirativity 解釈の由来と情報構造について」日本英語学会第 33 回大会ワークショップ「日英語を対象にした Mirativity 研究：統語論・意味論・語用論の観点から」、2015.11.21、関西外国語大学（大阪府・枚方市）
⑦ 金谷優「Because X 構文の主観性」第 3

回筑波英語学若手研究会、2015.9.11、奈良女子大学（奈良県・奈良市）
⑧ 島田雅晴「英語における等位複合語の生起について」東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催第２回ワークショップ「コーパスからわかる言語の可変性と普遍性」、2015.9.8、東北大学（宮城県・仙台市）
⑨ Kanetani, Masaru, "Private Expression within Public Expression: The Case of *Because X*," The 6th Biannual International Conference on the Linguistics of Contemporary English, 2015.8.21, ウィスコンシン大学マディソン校（マディソン・アメリカ）
⑩ Shimada, Masaharu, Akiko Nagano, Keita Ikarashi, Masatoshi Honda, and Ryohei Naya, "The Rise of Mirative Markers in Japanese via Grammaticalization Processes," The 22rd International Conference on Historical Linguistics, 2015.7.31, ナポリフィデリコ２世大学（ナポリ・イタリア）
⑪ Nagano, Akiko and Masaharu Shimada, "The English Derivational Suffix *a-* as a Bound Form of the Functional Category Pred," The 22rd International Conference on Historical Linguistics, 2015.7.28, ナポリフィデリコ２世大学（ナポリ・イタリア）
⑫ Wada, Naoaki, "Differences in the Semantic Range of the English, Dutch, and German Perfects and C-Gravitation," The 13th International Cognitive Linguistics Conference, 2015.7.24, ノーサンブリア大学（ニューカッスル・イギリス）
⑬ Nagano, Akiko and Masaharu Shimada, "How Poor Japanese Is in Adjectivizing Derivational Affixes and Why," Word Formation Theories II/Typology and Universals in Word-Formation III, 2015.6.27, パボル・ジョセフ・サファリク大学（コシツェ・スロバキア）
⑭ 廣瀬幸生「日英語における時間のメタファーと主観性―言語使用の三層モデルからの視点」広島大学「言語と情報研究プロジェクト」公開セミナー、2015.6.26、広島大学（広島県・東広島市）
⑮ Shimada, Masaharu and Akiko Nagano, "Translation of Prefix-Like Elements in Medical English," International Conference: the Word in Language and Discourse, 2015.3.17, ビャウィストク大学（ビャウィストク・ポーランド）
⑯ 廣瀬幸生「叙述型比較と領域型比較―比較構文の日英語対照研究」静岡県立大学意味論研究会、2014.12.20、静岡県立大学（静岡県・静岡市）
⑰ 島田雅晴「動詞に関わる史的変化と言語タイプ」日本英文学会中部支部第 66 回大会シンポジウム「英語の史的変化と言語のタイプ」、2014.10.18、中京大学（愛知県・名古屋市）
⑱ 金谷優「Because の新用法について」第 2 回筑波英語学若手研究会、2014.9.12、奈良女子大学（奈良県・奈良市）
⑲ Kanetani, Masaru, "*Because X*: Its Metonymic and Schematic Characteristics," The 8th International Conference on Construction Grammar, 2014.9.4, オスナブリュック大学（オスナブリュック・ドイツ）
⑳ Shimada, Masaharu and Akiko Nagano, "Borrowing of English Adpositions in Japanese," Linguistic Association of Great Britain Annual Meeting 2014, 2014.9.3, オックスフォード大学（オックスフォード・イギリス）
㉑ Naoaki Wada, "A Temporal Structure-Based Analysis of the 'Be To'-Construction," The 11th International Conference on Actionality, Tense, Aspect, Modality/Evidentiality, 2014.06.17, ピサ高等師範学校（ピサ・イタリア）
㉒ Shimada, Masaharu, Akiko Nagano, Tatsuhiro Okubo, and Masanao Asano, "Functions and Typology of the Compounding Stem: Meaning-Independent Elements in Compounds," The 16th International Morphology Meeting, 2014.5.29, ハンガリー科学アカデミー（ブダペスト・ハンガリー）
㉓ 廣瀬幸生「時間のメタファーと主観性：言語使用の三層モデルに基づく日英語対照研究」静岡県立大学意味論研究会、2013.12.13、静岡県立大学（静岡県・静岡市）
㉔ 廣瀬幸生「言語使用の三層モデル：概要と応用」日本英語学会第 31 回大会ワークショップ、2013.11.9、福岡大学（福岡県・福岡市）
㉕ Kanetani, Masaru, "Grammar vs. Preference: The Case of NP-Adverb Clause Construction," The 5th International Conference on the Linguistics of Contemporary English, 2013.9.27, テキサス大学オースティン校（オースティン・アメリカ）
㉖ Nagano, Akiko and Masaharu Shimada, "Adpositional Morphemes in Japanese: Contact with Chinese and English," SLE (Societas Linguistica Europaea) 2013 Workshop: Typology of Adposition and Case Marker Borrowing, 2013.9.20, スプリット大学（スプリット・クロアチア）
㉗ Nagano, Akiko and Masaharu Shimada, "Relational Adjectives (RAs) in Japanese and the RA vs. PP Debate," Mediterranean Morphology Meeting 9,

2013.9.16, ザグレブ大学（ザグレブ・クロアチア）

㉘ Shimada, Masaharu and Akiko Nagano, “Morphology of Direct Modification in Japanese,” Morphology and Its Interfaces, 2013.9.13, リール第三大学（リール・フランス）

㉙ 金谷優「なぜ副詞節による名詞句の修飾が認可されるのか？」第 1 回筑波英語学若手研究会、2013.9.6、奈良女子大学（奈良県・奈良市）

㉚ 加賀信広「日本語受動文の統語と意味―階層的意味役割理論の観点から」韓国日本研究団体第 2 回国際学術大会、2013.8.23、嘉泉大学校（城南市・韓国）

㉛ 廣瀬幸生「言語使用の三層モデル：文法と語用論の関係に関する日英語対照研究」関西言語学会第 38 回大会、2013.6.8、同志社大学今出川キャンパス（京都府・京都市）

㉜ 加賀信広「意味役割と格特性―統語論から見る英語諸構文」日本英文学会第 85 回大会シンポジウム、2013.5.26、東北大学（宮城県・仙台市）

㉝ Wada, Naoaki, “A Comparative Analysis of Some Differences in the Use of the ‘Future’ Tense in English and French,” Association Francaise de Linguistique Cognitive 5, 2013.5.16, リール第三大学（リール・フランス）

㉞ Shimada, Masaharu, Akiko Nagano and Tatsuhiro Okubo, “Lexeme, Stem, and Word-Form: Compounding as a Morphosyntactic Context,” Interdisciplinary Workshop on Grammatical Word, 2013.5.11, カリフォルニア大学デービス校（デービス・アメリカ）

㉟ Naoaki Wada, “A C-Gravitation Analysis of the Semantic-Range Shift of Perfects and Beyond: A Contrastive Study of English, Dutch and German,” Typology Seminar in Tense and Aspect at Universiteit Antwerpen, 2012.10.30, アントワープ大学（アントワープ・ベルギー）

㊱ Naoaki Wada, “Towards a Systematic Analysis of English and Japanese Tense Phenomena,” Séminaire de Linguistique 2012-2013 ("Science, Texts, Language (STL)" of France's National Scientific Counsil), 2012.10.26, リール第三大学（リール・フランス）

㊲ Naoaki Wada, “A Critical Evaluation of Declerck's Tense System and Its Comparison with Wada's Tense System,” Advanced Linguistics Course of Graduate School at Université Lille 3, 2012.10.25, リール第三大学（リール・フランス）

㊳ Kanetani, Masaru, “Legitimate vs. Faulty Interfaces: The Case of Functional Shift and Anomalous NP-Modifications,” Interfaces in English Linguistics 2012, 2012.10.13, カーロリ・ガシュパール・カルビン派大学（ブダペスト・ハンガリー）

㊴ 廣瀬幸生「認知言語学と日英語対照研究―ことばからこころと文化に迫る」日本認知言語学会 2012 年度認知言語学セミナー、2012.9.7、大東文化大学（東京都・板橋区）

㊵ 和田尚明「公的表現・私的表現と間接話法補部の時制現象：対照言語学的分析」第 3 回引用・話法の会、2012.8.31、筑波大学（茨城県・つくば市）

㊶ Shimada, Masaharu, “Three Types of Coordinated Compounds: Comparison between Western and Asian Languages,” Universals and Typology in Word-Formation II, 2012.8.28, パボル・ジョセフ・サファリク大学（コシツェ・スロバキア）

㊷ 和田尚明「Will と Be Going To についての一考察」真岡英語研究会、2012.8.20、真岡市役所（栃木県・真岡市）

㊸ Kanetani, Masaru, “Mechanisms When an Adverb Clause Modifies a Noun Phrase,” The Seventh International Conference on Construction Grammar, 2012.8.12, 韓国外国語大学校（ソウル・韓国）

〔図書〕（計１件）

① 和田尚明、渡邊淳也（編）『時制ならびにその関連領域と認知のメカニズム（2012 年度～2015 年度 JSPS 科研費・基盤研究（C）「日英語ならびに西欧諸語における時制・モダリティ・アスペクトの包括的研究」（課題番号 24520530）による論文集）』TAME 研究会、2015、223 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

廣瀬　幸生（HIROSE, Yukio）
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：００１８１２１４

(2)研究分担者

加賀　信広（KAGA, Nobuhiro）
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：２０１８５７０５

島田　雅晴（SHIMADA, Masaharu）
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：３０２５４８９０

和田　尚明（WADA, Naoaki）
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：４０２８２２６４

金谷　優（KANETANI, Masaru）
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：５０５４７９０８